

俳諧

花實器白集

春

832-5

俳諧資料カード

⑧

年代	文政8年 天保5年
編者 (筆者)	長本 2583
書名	花実器白集
備考	春 冬 924

(下垣内蔵)



吳市阿賀北五丁自三十番六号
電話〇〇三三
下垣内
和久
737

實發句集序

夫情感於物則發于言焉
其發也有詩有歌有賦強
有諧歌亦各從其所得也
雖然其情不實則其言浮

駁醇美粹純々辭將焉眩
々邪余也性嗜社歌遊方
多年得諸家々句者亦不
為不多矣今也其選醇而
粹能昭夙雅々體裁去編

一冊子名曰俳諧花實集
蓋花者文也實者質也苟
文質々不相適様々體
所以無有也今々撰意有
于茲云四方覽披々云子

斯恒以閱斯編則知未之
非誕

天保壬辰仲春

洛蕙畝管長成識



二

夕暮の心なき瓢の秋知しあそ
水曼自然後痛中なる操例の
端子知字もやち西都年危の
重仙も草葉集の七は若きころそ
法解古の心算とさうさうせん

陰人なき後部のすなはたの
蕙前俊士のけしきをしのぶ
実をたねうりさねをばやた
らくんとくし中世の世をうと
きまらば琵琶湖のうらやま

かをたたくたん斗のぬきもの
とけくまうりすべしはあま
素花の實はくぬたやねさ
をば又いふまはあまの實は
ひまわりくぬたのさる捨さる

まゝの空の風はのち物不
持とらへたよ

七五

于時又改己丑

十申井誌

初喜

四

俳諧花實發句集春之部

正月

皇都蕙畝長成編

正月

正月の月影のこころ紫のうね 甲州 葛里

裏のけし正月さやふねのち 江戸 鶯

正月の正月まー 芥草 大坂 公路

正月の春物着てけり拾穂 江州 影

正月のさよふえふけり悔 大坂 竹

正月の梅の葉さきけん、五 英

西月を扱のきつしきよゆかり
 西月や雑菜も古き並くころ
 西月や々々も久き拵いこと
 西月やをくくも存も近代のき
 西月のとのあく神のおあざ
 人まんとつらつらき眩月が
 つつしと人よりの五時月が
 雪よ西月すもや齒石のこし
 わつしと舟を任せも時月が
 ありつ打白せも調麻あり

京 陶居
 大坂 春哉
 大坂 蟻兄
 大坂 波等
 大坂 一菜
 二鶴
 魚眼
 麥由
 素壁
 長成

信州
 春花実を

四方表

歳且

小宮の末よりえへて四方の女
 大門へ号を流して四方の女
 一日のよめ笑へく不き丸山
 松むの上よきくもや神の女
 杉物下無ん女あつり
 ちりり初まきしぬあ乃女
 あまの海心もろや初あさ
 月あまや二万と月の初解り
 ちせきもあまのあねや浦の伝
 ちりりく柳あまそとくもあぬ

京 蒼虬
 大坂 長齋
 大坂 素壁
 大坂 葵亭
 河内 来相
 大坂 藍外
 大坂 佳雀
 大坂 貞瑛
 桐拙

明春

春も来てるのまの房のあけ

江戸 蕉 来

今調春

好乃まの唄うたききかしのま

大坂 夜 来

目赤の空も次春

永 木 来

春のついでんてまやまのま

越中 大坂 長 齋

おきけつら人の海鳥やまのま

長 齋

まやねんてんまやんを歌のま

来 相

かきおまの原山をまのま

長 成

まのまふまのまきけまのま

大江丸

宙まのまのまかへりぬまのま

公 路

花春

花のまのまのまのまのまのま

春花英卦

初春

初春のまのまのまのまのま

京 素 童

初鷄

初鷄のまのまのまのまのま

信州 蕙 布

初鳥

初鳥のまのまのまのまのま

大坂 井 九 女

初鷄

初鷄のまのまのまのまのま

文 頂

初鳥

初鳥のまのまのまのまのま

外 海 尼

初鳥

初鳥のまのまのまのまのま

冬 色 尼

初東風

初東風の吹うそ本かろりそ

大坂

遅柳

元朝

元朝のうやふ羽の野の都

京

木海

え朝やまのふのやハき年のそ

スミ

塊翁

元朝の詠人ハよれはてのう

大坂

西月

初日

色かえぬ松まりのうハ初り親

エト

王光

初日にも嫁いづもの月の松

京

世南

初日のやまの葉のう人の初り親

智西

初日のふみお花や初りの金

貞破

春花集四

元日

元日又寸乞食仲らるのう

江戸

木海

初日さけまきまきせん小室相

史千

えりもたはしくしむあつち

竹吾

えりや二りまかき夕まふき

素藤

母子ゆれハえりのうとま

大江

えりやまは落の松まゆのそ

大坂

えりやねまきまきもの古盒

公路

えりやさうまは似てま人の親

椿堂

えりやまは似てま人の親

及

水祝 水程すゝやねしりりしま 棋日
齒固 齒かあわさの存の餅を飽ん 器充

籬煮 籬あの心に焚くたぬ 扇川
年玉 年玉かさはらはらまるふ取 鶯笠
福涌 風終しけたふと福涌一 葛三

屠菴 屠あの心に焚くたぬ 紙杖
福涌 風終しけたふと福涌一 葛三

蓮菜 屠菴あの心に焚くたぬ 棋日
屠菴 屠あの心に焚くたぬ 紙杖

春名

屠菴あの心に焚くたぬ 棋日
屠菴あの心に焚くたぬ 紙杖

屠菴あの心に焚くたぬ 棋日
屠菴あの心に焚くたぬ 紙杖

屠菴あの心に焚くたぬ 棋日
屠菴あの心に焚くたぬ 紙杖

屠菴あの心に焚くたぬ 棋日
屠菴あの心に焚くたぬ 紙杖

屠菴あの心に焚くたぬ 棋日
屠菴あの心に焚くたぬ 紙杖

春夜更八

田作

田作のや成のまゝのほほほほ

大坂 万 美 珩 拙

福藁

福藁のよもぎのふりつか

蕉 雨

年男

年男のよもぎのふりつか

大坂 凡 馬

書初

書初のよもぎのふりつか

二 柳

弓始

弓始のよもぎのふりつか

河内 立 朝

大坂 撰 烏

春夜更八

万歳

万歳又訓隆存もなかり

夜 来

万才

万才のよもぎのふりつか

二 津 人

万才

万才のよもぎのふりつか

アキ 炉 扇

万才

万才のよもぎのふりつか

サカ 一 漆

猿引

猿引のよもぎのふりつか

越中 千 崖

猿引

猿引のよもぎのふりつか

イカ 猪 来 大坂 東 堤

子日 夏をこのつとよむのふのりん エト 道志

うねいさふもからぬ子のい 素 素

ふほさやふりりた人の通 六 蟻兄

てふくのふふ日 近江 祇杖

ふみ踏ておのころつりよき 桃 桃

又後せはるのふと 几 几

ほろ碎のふの白 君 君

加着河 皓 皓

任考へ 桐 桐

ふみ 武 武

武陵

春不更十

けふつの子 来 来

雪のふつ 五 五

も早 石 石

神 万 万

合 布 布

折 雪 雪

ふ 雄 雄

ふ 長 長

ふ 成 成

ふ 春 春

春永

入日

三人

夫亦をわて挿る 牡丹根 サカヒ 花妖
 夫亦をわたり 下 月臣
 人りも昔の松原の青木 ニ下 寥 松
 人りや 又是へのり 護物
 人りや 蘇芳のわき 凌雲 イタミ
 七 草 よせ 狼はなし 掃り 藍外 ナニ
 ころつ 夫を抄ぬ 玉屑
 七 草 の 後 も 破よきくまが 公 路
 七 草 を ころす 椿 堂
 七 草 や おろし 喜 齋 サカヒ

春花実十一

蒜 蒜初多や 其 成
 ころ 筋の 大坂 九 歌
 用を 公 路
 若菜粥 千 龍
 小正月 来 耜
 柳 井 六
 福寿押 公 路
 胡凡や 香 雨
 下 蒔 蕙 布
 下 蒔 桑 谷

下り人のくきほくしり月が

十六

初緑

子やうし柳をわらう初こり

竹窓

くちうしもたのてし初こり

素朗

若草

さるるまちいさきせんりさるる

遅柳女

さるるまふしニすのひるり

宗徳

さるるまふしとほてし旅かろ

夜来

さるるまふし山凡かふ垣のち

巢兆

さるるまふし海ハ昔いかりたのき

朗調

たれさるるまふし兼ふさり海ハあき

長成

さるるまふしき年の若く風さるる

玉屑

春の花文十二

芽柳

ほろろのつらなけりり柳の芽

江州

風はさるるまふし人かくて柳の芽

林糸

芽柳やさるるのひてまの上

其由

春州

さるるまふし月をさるるまふし

夢長

さるるまふしまふし時のみさるるま

寥松

本まふしふさるるまふし

冬色尼

楷のりのまふし申れ

あふむ

初草

初まふし初まふしほのほちうら

三美

初まふし初まふし人よ訓ねり

布文

芽芒

芽芒やさるる武志はさるる

丸鑿

世か高へのよき所へ世の芽 サト 吾風

芽芒や如芥河 流るるはら サト 麦荷

朝暫嫌葉 胡白のそへて客身月 サト 可布

落 露 祢この事るる付るり サト 乙雀

宿青路一氷の修や 露のま サト 奇衣

如月よ追るるりのよ サト 長成

人位もえともたき サト 魚眼

一志路の御 サト 葵道

何をもきてつ サト 鷺洲

如糸の青 サト 雲峰

春衣食上

嫁 菜 白木の子か 十三 紫水
括よ出て嫁菜の外 十三 美崎
よの底の澄を洗ふ根 三カハ 秋拳
東川も氷 二ト 道彦
芥のまの葉 二ト 夜来
と月 二ト 玉屑
甲 二ト 公略
芥 二ト 素壁
芦角 二ト 米彦
木芽 二ト 里雀

芥 芥 二ト 素壁
芦角 二ト 米彦
木芽 二ト 里雀

杉紫のるまつけてもく免の木
 いぢつまもこぼれまのこく免の木
 梅かろくひりませる一ぼく船
 後の梅小擧かえて眠きけり
 夜まらふ声うきくやう免の石
 ちれまの梅まけけり梅の石
 さまのつづつまめめ梅の石
 梅の舞の袖の煙まめ梅の石
 中庭よま百まうりう免のまめ
 おももままと申うまきや山の梅

蒼 虬
 木 海
 雪 雄
 梅 價
 岱 雨
 陶 奇
 五 英
 束 報
 祇 杖

春の巻(十八)

梅おやつくほう人よまはる日
 中遠いまがりて梅まはる日
 大坂とつゝ在取つりう免の石
 江戸へ行連も出まらう池の梅
 梅をいづの心えへまらて
 赤まも上り音をう免の石
 堀まかき木場の石まや梅の石
 山うけや咲くませー梅の石
 朝白のまままきくまし梅の石
 夕のまのまままきくまし梅の石

卧 鵬
 泥 中
 字 三
 五 錐
 栗 女
 一 茶
 護 物
 寥 招
 南 井
 太 節

田の中や人のむめきの梅のふ ナニ 干崖
 梅のふよまをせし新徑のふ イセ 貞拱
 せんきうま糖もなれ梅のふ イセ 長齋
 梅のふよ一畝梅もなれけふ イセ 沙鴨
 梅のふよ葉のけのふよ二り梅 イセ 椿堂
 たいつのふよ梅のふよ イセ 藏六
 うまのふよ梅のふよ イセ 何籟
 竹信路や砂ふと割く梅のふ イセ 其成
 梅のふよふも梅や隣り イセ 士由
 梅のふよとや イセ 漫二

春名集十六

ふまのふよ ナニ 吾崔
 よう田山梅會も合す梅のふ イセ 奇袁
 石根石をくふ並かへて梅のふ イセ 省吾
 山のふよ野の梅もなれ山屋 イセ 弓雄
 山のふよや イセ 一
 風呂のふよ イセ 陶屋
 坊のふよ イセ 太乙
 梅のふよ イセ 蕉里
 ふよ イセ 夢南
 月お イセ 玉屑

子心るまへへいとも梅の心 下 道彦
 立しり人梅の心ありさるる追 下 武陵
 鳴くえて二程とくぬ風の梅 下 成美
 ふやまのかさる水鏡や梅の房 鶯蒲
 よきえこの餅くし出外て梅の心 千影
 人の心あり梅よまなや梅の心 宇柏
 山のまみ人つちの心 梅の心 比良
 梅つるる心まきまき人をもくぬ イタミ 紫金
 梅うま字も元むとむとむと フニ 月居
 山梅もくく色とつる梅の心 葵亭

山の梅もく人つちの心まきまき 下 祿帰
 おくくくくくくくくくくくく 下 山口
 ふくくくくくくくくくくくく 下 李江女
 梅も月守人つちの心まきまき 下 竹吾
 山梅の心房もくくくくく 大坂 倉
 おれぬぬ追もく人つちの心まきまき 下 双居
 梅もくくくくくくくくくくく 下 漢
 梅もくくくくくくくくくくく 下 秋
 古々の梅もくくくくくくくく 下 且水
 梅もくくくくくくくくくくく 下 岩招

白草の物をやうに染まると
 あらう地よりのるるき物
 春柳やその夏の花とこそ
 春柳中はぬるやうにひら
 き甲よふととて柳うか
 きあつてふまゝに定ぬ柳
 春あつてふまゝに定ぬ柳
 春の風のふらうり届く柳
 春の風のふらうり届く柳
 ふらうり届く柳
 春の風のふらうり届く柳

公 路
 常 躬
 椿 堂
 武 陵
 貞 琪
 葛 里
 敬 齋
 奇 淵
 貨 撰
 奇 撰

春巻九十九

初平の人のひけ
 洗星のうれしき柳
 新渡のやうな柳
 柳の葉や柳の葉
 風の葉や柳の葉
 鳥をよめてさうや柳の葉
 春柳の葉をよめてさうや柳の葉
 春柳の葉をよめてさうや柳の葉

土 厚
 布 雲
 千 崖
 梅 價
 弓 雄
 大 井
 陵 雲
 藏 六
 其 成
 日 人

海山よきうからし 若か
 隣りくま波さまも 柳の
 ちりくく人へて消さまき柳
 舟風のそよもる 舟の柳が
 柳えてわ別かりく 柳の
 ちりけく 柳の
 柳のりふさ人わき 柳の
 若柳のくくく 柳の
 ちりけてささか 柳の
 嘆声の吹かへく 柳の

葵亭
 鳥頂
 女南
 長成
 五錐
 万拙
 来耜
 茂推
 道彦
 夙也

春名夏廿

精をりまゆり 柳の
 人きて月よ親き 柳の
 人ふ枝うつり 柳の
 若柳よ目立よる 柳の
 若柳や瓢箪へき 柳の
 葉のふまやまの 柳の
 人呼て根うさく 柳の
 ちりかりく 柳の
 ちりかりく 柳の
 若柳よは母の 柳の

魚胆
 五英
 素葉
 梅日
 井丸
 青洒
 兔月
 月居
 風谷
 士朗

変はくさばや 身者もの柳 雲雄
 ち柳の命たりよ不二龍波 参光
 斗も柳よふも物よ帰るる 桐拙
 ち柳の宿るもふもけまら 浅推
 ち中よりきけりこも柳か 蒼虬
 酒の免といふぬ斗の柳うか 遊 彦角
 暁も二夜よりけり 梅柳 作者不知
 こも柳も折るもあまの梅柳 弓雄
 梅柳もうけとあまの無さる 井眉
 梅も生こ柳もうつる回るる 千
 春花苑廿一

梅柳

海苔

梅柳人き出たり 京田令 桐拙
 ち梅柳も折るもあまの梅柳 長成
 梅柳もあまの梅柳も折るる 杉長
 つりもよ古海苔のま費り 若助
 けのりやとちやらまのまきり 花乙女
 又ぬるりのりわも海苔も白ひり 貞拱
 ちの平の海苔のまきり 烏項
 耐も斗つてはまきりせんさるる 其督
 ち梅柳も月も白く折る声 雲帯
 梅柳も折るもあまの梅柳 布丈

草嬾葉

鶯

うゝ鳥も昔よなれてまゝな棟
四河の夕氣いまゝ
鶯や啼うて互りもきくまゝ
鶯のよみて先嫁
鶯のこゝろのむくまのうけ
鶯や焼折りよ井とぬきあり
りかゝるや鶯の垣のうゝ表
鶯のまきらうと流るゝか
鶯よゝゝとさるゝ朝露
鶯のまき若く初めひらり

共格
南實
鶯笠
公路
凡馬
可都里
蒼虬
長成
椿堂
武陵

春花夏廿三

鶯や初きとりもたつと今
鶯の若葉みよと打せり
鶯よゝゝとまきほしめり小鳥が
鶯のつて仕舞へる身の源さ
鶯のるりや 鶯の起はれ詩の
鶯やゝゝとなき日へ知こす
鶯のめりゝゝと流るゝ河の川
鶯のひらりゝゝとぬきわたり
鶯やゝゝとまきほしめり小鳥が
鶯のまき若く初めひらり

十六
竹吾
素畜
五英
十六
卧鵬
来報
素磔
卓池
廿南
万栖
奇袁

雪雄
 蕉兩
 省吾
 青良
 井眉
 士得
 魚眼
 五錐
 南井
 石膽

春在夏三

葵亭
 其成
 岱雨
 千影
 万籟
 井六
 嘴笛
 洞拙
 希孫
 吳老

中に入ろ 学 夏よかまひなり
 学や 船をいりしんいひつせ
 学や 只のまかきと 椰トの宿
 百千鳥 ねねも 丈のいりつり なるを
 動う物まき 丈のいり なるを
 勢や 魚の 煙ハ 本まうつ
 勢や 魚や 木のを 水のま
 白魚 なるの ちいさき 春うも 日影
 なるよ 目の ぼりつ ぼりつ
 なるの かくとの ません 草の 帽子
 長齋 木海 寒屋 来 春哉 菊賀 蘿雲 公路 蕉雨

春花夏世

其成 玉之 棋日 魚眼 秋禾 鶴舍 艾成 株六 紙杖 三津人
 なるや 暖うき 日の ぼりつ
 なる魚 なるか なる小 なるも なるなり や
 なるなる や ねの 夕夕も ねなる
 海の なるけ なるま と なるなる
 子 ねや 親の かくて なるこ ぼりつ
 なるなる なるなる なるなる なるなる
 なるなる の なるなる なるなる なるなる
 なるなる の なるなる なるなる なるなる
 なるなる なるなる なるなる なるなる
 なるなる なるなる なるなる なるなる

蜆

刺

木芽漬 草も花いささかあり木芽漬

深山梅や相ふもあはれ

英めくはてしなく挿へば山一草

春日 春の日の思やとまらぬ

帳かきも孫子つれごとく春の白

春風 春風もえはれや春の風

春風や一声なき響の色

春風や波のうきうき入り

春風や山紫梅多住斗

杉のその古き花や春の風

楽只

林糸

千溪

井眉

李尺

来相

公路

蕉雨

扇

春の夜廿五

春風の外は風なり 昼の松

春風や揺るも並に忌の松

春風や春の力あはれのはらき

さくらの酒を飲すお春の風

春風やまこと昼の松の月

春風のぬらひよあり和音の伝

吹まかりかのうきより春の風

春風や心柳まつり

春風や袖のうきうき不二の山

魚眼

卧鵬

椿堂

其成

士得

貞皓

呉来

桐拙

武陵

東風やまの木のつゝかぢりイセ南雅
 春風やまの果報やいせの笠 守三
 圓子を入る埃もはじきまの風 貨撰
 春風やよきあし甲ニ下一肖
 憐れも七の起はふまの風 舞六
 春風や町の出口の松さ 宇拍
 春風のは殿はふらむかきさか 夜来
 川よもや葉房集ま春の風ヒコ宇都襟
 初春風や海土り石も十斗 几馬
 東風はま一板強ぬらん木のやうヤ糸
 瑛

春花夏芸

春 雪
 東風ふくや始めてゆく雪も水 作者不詳
 春の雪を小松うかめて仕立なり 石 簪
 古きやまの雪降る層月叔ナラ素 卿
 降とて急がくならぬまの雪 其 成
 まの雪を雪なると降ては清し 井 眉
 大雪やすしし降てまの雪 其 梅
 常盤木よりつりて降やまの雪タニ万 籟
 又自傍のまの小石やまの雪 祇 杖
 淡雪や小石のえ申す梅の枝フク北 溟
 淡雪は板打直はるるけ雪墨 棠

淡 雪

残雪

残雪やるるりまのたつ山

巍道

雪化通ふ人わさく

万籟

残雪や忽然と立丁をツ

岳輅

雪解

ゆき解きき雪解の後の強が

月居

梅うまき浮程つゝの雪解

魯隱

一歩り蔬うまき雪解川

三津人

雪解きえまつてあや

道彦

氷解

氷の解けりあきり田の氷

玉屑

こつ月や氷のそよの氷

作者不詳

凍解

凍解てふま清き山路う

皓月

春を美せ

水温

水部の汁の夏もくも凍解

弓雄

冬も解るるりあきり水解

奇

あきりの氷の解けりあきり

徐光

あきりあきりあきりあきり

申齋

撞霞

撞つるも人のあきりあきり

芦節

あきりあきりあきりあきり

星濬

あきりあきりあきりあきり

多宮丸

霞

あきりあきりあきりあきり

竹吾

あきりあきりあきりあきり

素律

あきりあきりあきりあきり

秋拳

あしと堀も産むや峰あり
くま木橋家の藤の娘へ
井代て産むらうよ跡りなり
鏡波根やうき産む時うき
榮ふりも志ありやあむ少あひ
柳酒と春の葉乃り消多返
夕ふきや積りぬりの公事
海三好一ツもあかきり
清ふるとあむや産の松乃若
菴お戸や産むらうらうて

来耜 寥松 吳耒 道彦 奇衰 文衣女 井眉 如髮 馬老 晚籟

春花実六

をさひつちあめいこふ引うふ
産りや産む西遊まふり
産むれとわさう山家の大細麻
今春うき産むかじしうき
山あきと産むや校摺あむ
産よりもれ物うき○の産む
打産むやすのうき夏乃人
引汝の采かき産む海きか
産む似て人もいさかす産む
一ひきり産むらうらうて

竺齋 夢綺 史節 雪雄 夙也 貞摠 月居 玉屑 尺艾 楪日

暖

春寒

栗や松の雪もひしくつひ、
うすつきの人えぬまきもりや
栗やついでし出た江ノ親
あさうと操紀さうおひり
かみも梅子有りの 咳まが
おふねと咳まが背負ふ山が
てふふと二りかきや咳まの
まきし月まきまき 松まき
まきし月の少きよ山のや
ころおまおのまきまきまき

栗枝 竹吾 史節 玉屑 吾風 布丈 芦州 重行 蕉兩 道彦

春夜文三

余寒

ふをれて咳まがまきまき 余まき
うすつき余まきまきまき 余まき
まきまきまきまきまき 余まき
隙まきまきまきまき 余まき
ふまきまきまきまき 余まき
親まきまきまきまき 余まき
松まきまきまきまき 余まき
余まきまきまきまき 余まき

閑齋 五維 谷雄 蒼虬 竹吾 龍末 青樟 祇杖 星潛 徐光

江州

廿二

牙還

牙還のまゝ余をこのはのかゝるヨク 眞と
猶ほおろうねてうゝこまえかへ十六 佳葉

牙還と換殺さすや 大坂 古宇女

牙還とは言ふあやうき言のまゝ 来之

まゝさすや梅のまゝさすも牙還ふ 舍来

御忌

加茂川のまゝおろすや忠の子 乙彦

忠志の子はまゝと申すも 其成

まゝの浦の外へおけり忠志の子 士明

佐保姫

佐保姫の櫛を人へおけり 招前 布席

佐保姫まゝさすはまゝの身 玉之

春名実世

佐保姫の目障りのまの姫様一 春 峩

二月

二月 袴返ふりまゝ二月大坂 太 笥

まゝてのちお風の夜二月大坂 小 映

まゝの少時まゝ二月大坂 魯 隠

まゝの御もまの丁返ふ二月大坂 茅 丸

かまのつねほまゝ二月大坂 乙 雀

初芝居

松凡の施ぬく免しや初芝居

美珽

水取
芝能

芝能わまの脊中も夕いろ

南賓

芝能わまの脊中も夕いろ

招齋

芝能わまの脊中も夕いろ

布衣

初年やまのり依家のくはり

魏道 タシコ

初年の笈ひるるはやも師の家

祇杖

初年や月鏡よりくはり渡月橋

居十

初年や芽を以初る芝山

夜来

初年や後つ月まつくも花苗

木海

初年や舟を打也ふ俗の息

旧國

芝能わまの脊中も夕いろ

布衣

芝能わまの脊中も夕いろ

南賓

芝能わまの脊中も夕いろ

招齋

芝能わまの脊中も夕いろ

布衣

涅槃像

このまのつちをわらう涅槃像、月巢

花のまの梅もは葉へ花もんが、五英

りひよりと花もんよふれ、作者不知

花のまの梅もは葉へ花もんが、木海

孫のまの梅もは葉へ花もんが、歌文

はらり招のまの葉もんが、李山

はらり招のまの葉もんが、素雲

本佛

柱炬火

西行忌

壬生念禰

彼岸

す門柱炬火よりき程時掛之

をさけて柱炬火のよき

とてわらうをのやうに物初忌

を軒をきくはくはくうとて

袖のあててとていさうをまよふ

小杉邸や彼岸をせよのゆけ通り

かゝるまゝのゆきかたははははは

あゝとて人の業のふえやふんが

むらりてお梅のふりいんが

彼岸をきくや人の路り規う

素雲

春峨

米彦

素壁

井眉

空阿

むさ女

佛者不知

桃窠

五錐

春夜更世

治聾酒

臈月

途のまゝに彼暮の路のひり

彼岸をきくや古き歌のふりはは

治聾酒や清心三三のまゝ山寺

治聾酒や嘘を麻定のをまゝ何

治聾酒や増えりりのいさや

枕接て柳心こゝで治聾酒

史不の神をきくや月

朝白の二重をきく月

ちりきくぬおをまゝ接や月

二のまゝに接や月

藍外

紫笛

喜齋

芳枝

玉樹女

松樂

五英

鷲道

野場

君十

古きものこころ古いと云ふの月
 いられていつ中々もよそもの月
 ぬれをぬれぬけをまきの月
 藤の村にみえ連れやまきの月
 海よりみよと待たれてまきの月
 船々も度吹くくまきの月
 岩垣を袖引うけてまきの月
 ちうけのほよこまきてまきの月
 雪のつ子のまきこ意うてまきの月

蟹守 士得 玄蛙 十丈 廿古 士明 芟九 益外 糎 奇測

春夜更世

雪のこころ古いと云ふの月
 いられていつ中々もよそもの月
 ぬれをぬれぬけをまきの月
 藤の村にみえ連れやまきの月
 海よりみよと待たれてまきの月
 船々も度吹くくまきの月
 岩垣を袖引うけてまきの月
 ちうけのほよこまきてまきの月
 雪のつ子のまきこ意うてまきの月

呂 米 凡 五 漫 井 卓 万 株 可都里
 祠 友 馬 錐 久 眉 池 六 里

春夜

鶯とすすして車ぬまの月
糶摺とちりて宿とまの月
梅屋とほしめさほしまの月
山へけりまの夜原し津の虫
まのおおわらう鶯とまのつ
まのおおわらう山へ津の虫
まのおおわらうまの夜原し
まのおおわらうまの夜原し
まのおおわらうまの夜原し
まのおおわらうまの夜原し

梅 價
士 朗
素 磔
祇 杖
公 路
而 后
石 膽
星 濬
釣 翁
長 成

春夜更七

春宵

まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし

晚 籟
守 二
何 籟
鶯 太
武 陵
虚 白
空 阿
祇 杖
女 南
卧 鵬

春雨

まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし
まのおおとほしめさほし

女 南
卧 鵬

まるのわかりのりる女奴の池
 まるのやちばしまする物祀の池
 むししとちちの氣さほまもの
 まるのや田舎裏の戸のまきくま
 まるののえん悟めてはし野の野
 まるのの渦ま遊まりり輝ぐ
 まるのや右の西舞王樹年古
 まるのの酔のふさよくへる
 まるのの舟まはらまらりまの
 まるのや笠の下のまはらまの浦

来 頼 公 斗 蟻 井 鳥 斗 兄 路 末 石 報
 蒼 井 鳥 斗 兄 路 末 石 報
 長 成 蒼 井 鳥 斗 兄 路 末 石 報

春巻と夏世ハ

赤木

木の痛のうけはらまらり
 まるのや小田とまらりまらり
 まるのよ小舟とぬらまらり
 まるのやまらりまらり
 まるのの舌まらりまらり
 奈まらりまらりまらり
 まるのまらりまらり
 まるのまらりまらり
 まるのまらりまらり

其 督 若 物 魚 眼 鶯 笠 舍 末 護 物 夜 末 鼎 左 奇 表 太 乙

十二六

春人

まゝのやむぬまゝの晴うつり
まゝのわかたつとつ流の輝なく
まゝの任れ流を何ししまゝのる
まゝのの巻子まゝの山寺
ぬれてしと標の輝いやまのる
まゝの人笑まのせまゝの房いなり
まゝの中い流をらううとまゝの人
まゝの人まゝのきれいかにまゝの人
五六人なりうして流ぬまゝの水
胡起の笠者あふてまゝの水

起 蝶
椿 堂
十 丈
猪 来
甘 古
三 津 人
五 英
而 后
雲 雄
一 路

春夜夏世九

春水

まゝののうとつてまゝののあ
湖の中まゝのゆとまゝの水
山は尾のまゝのうとまゝの水
やうくしと氷まゝのゆとまゝの水
おの内を流るの流んとまゝの水
まゝのうとつてまゝのまゝの水
まゝのまゝのまゝのまゝの水
まゝのまゝのまゝのまゝの水
まゝのまゝのまゝのまゝの水
まゝのまゝのまゝのまゝの水
まゝのまゝのまゝのまゝの水

鳳 堂
茶 静
月 底
寥 松
馬 老
其 成
碓 嶺
祇 杖
奇 袁
重 行

十六

二十

春雲

春雲 朝くしや雲を敷くはもよほり雲

素童 越前 振々 万 長 松 一 瓢 文衣女 鶯 笠 千 影 馬 若

春海

春海 春の海は波も静かきなり

春雲 四下

陽炎

陽炎 陽の光はまぼろしを照らす

草齋 十一 魯 隱 莖 揚 護 物 一 路 武 陵 漫 栗 女 夜 未 駝 史

系遊

陽をやすくの若しより
陽をやすくの若しより
いふふの果をまきつゝ入りが
いふふの果をまきつゝ入りが

井眉
祇杖
遅春
井九女

初雷

いふふの若しより
いふふの若しより
いふふの若しより
いふふの若しより

喜齋
松甫
鳥六

初電

有るはまきつゝ入りが

大江丸

苗代

苗代やる魂をく夜のはな
苗代やる魂をく夜のはな
苗代やる魂をく夜のはな
苗代やる魂をく夜のはな

雲居
鉤月
樂只
雲雄
南井
蕉雨

種井

種井の若しより
種井の若しより
種井の若しより
種井の若しより

千影
公路
其美
紫水

種積

種積の若しより
種積の若しより
種積の若しより
種積の若しより

紫水

種積

種積の若しより
種積の若しより
種積の若しより
種積の若しより

紫水

春名美甲一

独活

三五筋抄抄七文、海手、
まじりの書海、海、中、
くものまやおのりて、一、
甚切、ま、ま、海、中、
独活のま、ま、ま、動きぬ山、
ノ、ま、の、ま、ま、舟、
ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、
月、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

光都
千影
十丈
藍外
魚眼
烏六
花妖
高頂
湖翠
公路

莖姑

三五筋抄抄七文、海手、
まじりの書海、海、中、
くものまやおのりて、一、
甚切、ま、ま、海、中、
独活のま、ま、ま、動きぬ山、
ノ、ま、の、ま、ま、舟、
ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、
月、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

光都
千影
十丈
藍外
魚眼
烏六
花妖
高頂
湖翠
公路

薊

三五筋抄抄七文、海手、
まじりの書海、海、中、
くものまやおのりて、一、
甚切、ま、ま、海、中、
独活のま、ま、ま、動きぬ山、
ノ、ま、の、ま、ま、舟、
ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、
月、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

光都
千影
十丈
藍外
魚眼
烏六
花妖
高頂
湖翠
公路

菜花

三五筋抄抄七文、海手、
まじりの書海、海、中、
くものまやおのりて、一、
甚切、ま、ま、海、中、
独活のま、ま、ま、動きぬ山、
ノ、ま、の、ま、ま、舟、
ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、
月、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

光都
千影
十丈
藍外
魚眼
烏六
花妖
高頂
湖翠
公路

春花夏田

菜のふやこは、田、
菜のふのこは、
菜のふもつ、
菜のふの人と、
菜のふのか、
菜のふと、
菜のふの、
菜のふ、

卓池

菜のふのこは、
菜のふもつ、
菜のふの人と、
菜のふのか、
菜のふと、
菜のふの、
菜のふ、

秋葉

菜のふもつ、
菜のふの人と、
菜のふのか、
菜のふと、
菜のふの、
菜のふ、

月篋

菜のふの人と、
菜のふのか、
菜のふと、
菜のふの、
菜のふ、

宇拍

菜のふのか、
菜のふと、
菜のふの、
菜のふ、

魚眼

菜のふと、
菜のふの、
菜のふ、

外六

菜のふの、
菜のふ、

三津人

菜のふ、

長成

菜のふ、

玉光

菜のふ、

昌三

生大根

薺花

西月と云ふは春ふと云ふ薺

比良

若菰

若菰まきまきの入口まきふ

嵐角

苣

若菰もやちまきまきまきのま

梅鳥

蒜

若菰のまきまきまきまきのま

吐月

菊根分

若菰のまきまきまきまきのま

其梅

春名五甲五

紅梅

紅梅やつちまきまきまきのま

護物

紅梅や百戸斗の夕やう免

夙也

紅梅やちまきまきまきのま

夜未

紅梅や備るものちりけの山

月底

紅梅や種まきまきまきのま

西月

紅梅やまきまきまきまきのま

三津人

花銀杏

花銀杏まきまきまきまきのま

道彦

花銀杏のまきまきまきまきのま

芳之

花銀杏のまきまきまきまきのま

春峨

花銀杏のまきまきまきまきのま

君十

佛座

初不

白くし 祿は申すや 仙の座
 えぬのせり 穀へり 仙の座
 初不や 進きし人の 癖しそ
 初不や 牛什々つ 恰 丑
 初不や ちりしもの たり 貝の玉
 初不や 一方の 扱のすき 申しき
 初不の 扱や ちりつ 扱へ 毎
 初不や ちりし 辰己と 息がし
 初不や 花の 始候の ちり 区
 初不の 扱は ちりし ちり 團か 区

蕉 雨
 雪 雄
 峯 梅
 若 助
 公 路
 女 南
 盛 外
 尺 丈
 松 亦
 太 乙

春を夏に六

初 扱

初不や 扱 度とん ちり 赤 二 扱
 初不や 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不や 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不や 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不の 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不の 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不の 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不の 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不の 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱
 初不の 扱 ちり ちり 扱 ちり 扱

希 孫
 暮 科
 穆 齋
 三 侍 人
 米 彦
 来 柜
 沙 鴉
 其 成
 玉 屑
 巢 居

初場木よつとろハザりりり
 初さくろ木よ不ニヤコナレり
 山凡工翹きくく初さくろ
 初さくろ赤の所りろ又へりり
 おのけと中りろふや初さくろ
 人まろふ目おちのさく初さくろ
 初場敷月おもろまきろり
 けつくろてみろろり初場
 ともろろろろり初場

城杖 井眉 蕉里 奇表 扶堂 茶隱 遲春 草史 蕉雨 對山

春の美玉

連 椿

田の踏踏ちちちかー初さくろ
 嘆もせぬ橋おろりや初さくろ
 連翹やまの葉落ちまき入
 まき翹の葉まき入へぬろの舟
 山伏のあまかろろつろまき
 改ひそくろろの照り落核
 水ろろろろや核の灯をろり
 落ろろろろろろろ赤核
 掃音のろろろろろろろ
 下け星ろろろろろろ核

大成 素磔 竺齋 蒼虬 一卓 霞岫 万籟 夙也 守三 来拒

大坂

赤接れや根もなき沖の凡
 碎るや花のつけさ
 佛もなきの程よきつゝ
 葉もなきつゝ風情つゝ
 葉枝退ひよ出てり
 葉のその外もなきつゝ
 又てあかき年の心
 雪うらやましくし
 庭の接思抜やけし
 落枝移り時
 星 譜
 杜 蓼
 一 蕙
 批 年
 心 氷
 布 世 丸
 夜 来
 乙 雀
 道 彦
 雪 雄

春不美八

栢花

をくぬを己の鯨や栢の糸
 尺 丈

指木

大原や栢乃初来入を遣
 下 車 両

接穂

新の足もたまるの
 君 十

五加木

二心師のや五加木の
 乙 彦

西行

西行は西行中
 一 茶

雉子

夕雉子おつる原く事なかり
相さやよる原く雉子のあらひ
親らうやまらうや雉子の下り
湖や雉子ゆふの糸
人より遊々中らや雉子のあきら
ぬ在なく雉子のあきら少和原
甜さけや雉子のうら二和
くうと余房よりきーのま
まらぬの縁てこそうし雉子の声

五英 葵亭 芝山 蕉雨 塊翁 其成 蒼虬 可布 長成 猪来

春を大甲九

燕

今きうもあや雉子のあつらひと
まらぬまの似るおらう 雉子の
は雉子のまのわはははははは
きうはやうやうははははははは
まらぬのまのわははははははは
お解らぬの雉のうらははははは
まらぬのまのわははははははは
まらぬのまのわははははははは
まらぬのまのわははははははは
まらぬのまのわははははははは

若助 井眉 玉之 起蝶 如髮 益外 世南 月巢 蟻兄 卓池

歸雁

雁のこゝろをうてとくや古ぬのこ
老もよこつてはやしのさそぬ
枝の葉も赤きこほす老もよ
老も月もさすはやおのぢ
老もは味もやれぬ老も
老もや老もさすぬいせうふ
老も夕もさすぬやのさ
老も夕もさすぬやのさ
老も夕もさすぬやのさ

藍外 扇暑 梅居 若助 五雲 大江丸 文頂 貞瑛 長齋 月居

春名夏五十

法獄のちよははるふかかへす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす
法もも松子のよきよゆす

鯨亭 百非 武陵 雲雄 其成 十壺 鶯笠 君十 心非 素磔

ヨハリ

行雁

まらしき野も跡さけたり毎
行雁よふかしく人のやまむ切
りたりや或るまきの野のま
りたりはかきし初るる旅が
りたりは赤鯉の種中より
一よりききとて名跡うまの
ゆ月よきほどしむて山田の
杖よりききつらとてや女の
まらしき野のつらきつる雁
下風呂わらぬの心も帯やけ

卧 藍 春 道 尺 茅 弓 長 鶯 乙

春雁

下風呂

下風呂わらぬの心も帯やけ

鶯 乙

春在庚辛

雲雀

雲雀は遊ばせたり足袋の砂
落るよは町を打越に雲雀は
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁
まらしき野のつらきつる雁

班 卓 魚 團 末 眞 蕉 起 岸 長
車 池 眼 釋 耜 里 蝶 格 成

野揚 千影 長齋 君十 公路 凡馬 斗文 居里 文頂 公路
 せねく約うのみきや雀のみ
 人の心吟ひよ付しる雀のこ
 ちまのの移進ひをり雀のみ
 老の葉やまのの近後をす
 老の葉やまの甲引休まら
 老の葉や御世まわらぬおの
 老の葉や御のまをすこり中
 山へまぬまらと知れん陸屋
 後尾してまらまらまら
 朝をや毎の下行 くのきる

春名夏卒三

蝶

奇表 千糸 一 路 祇杖 竺仙 篤老 魚眼 藍外 蓼松 公路
 てふ二つひらくは根穀垣
 きのすれしてはまらまら乃藤
 中しはも那をりてのまら
 川隈やてまをらんとははら
 こころまき朝やまをまらとて
 藤さくまらとてはらぬ藤
 かられおれまの有せらてまら
 てふのまてはらまら 筆のま
 てふのまをまらけ方の朝やけ
 てふしやまのまらけまら

まの外やてまの縁れまのあけりは
廿二のわね追まねまのふら
てまのまの二つうねまの錦ま
てまのまのやまのまのつら
てまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

来 粗
道 樂
鼎 左
守 云
蕉 雨
獲 物
尺 丈
國 村
南 井
千 崖

春卷更五十四

蛇出穴

蛇

蜂

ま吹やてまのまのまのまの
てまの飛や杖まのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
てまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

徐 覚
若 助
末 礫
夜 末
梅 價
井 九 女
花 妖
乙 二
暮 来
貞 皓

ヤト

ナニ

蛙

たふたふおぼろしく心と蟬の親
多きまゝの野まはしむ蛙
大根のふくまふかまら
月のおま核まらかまら
何のみま蛙まら月丸
おの蛙うらまきりの数み
涙しきれまらまら蛙
附木まら田へ扱やれ行かまら
下系や蛙まら夏層桶
皆ゆい蛙や少田のおはらけ

十丈 草齋 五英 鼎 九 桐 抽 桐 芽 蒼 虬 芝 山 千 影

春を又五五

水音まらしし肩まらかまら
明かまらあやらまらり
蛙まらまらまらまら
蛙物まらまらまら
かまらまらおのまらまら
古まら蛙のまらまら
清くまらまらまらまら
ゆのまらまら蛙のまら
蛙まらまらまらまら
まらまらまらまらまら

鳥 頂 屋 鳥 来 路 公 路 長 成 鶯 笠 貞 瑛 士 得 蕪 街 其 成

田螺

枝の木の新つと良おそる地
おかしむその今を麻や明かそ
おかししししおかしつこつ
掃玉せんとおかしつこつ
おかしつこつおかしつこつ
おかしつこつおかしつこつ
おかしつこつおかしつこつ
おかしつこつおかしつこつ

布 雪
椿 堂
素 磔
長 齋
道 彦
平 角
對 山
五 英
星 僭
川 鵬

春夜集卷六

貝寄

竹うきと浪もよみぬ
笠笠とやうや栗はつ田
うきとをくけうきつ
山の朝回りのつよさ
貝あやひろひ集め
貝あや臨風の朝の月
うきと月梅はつじも
貝あややゆきねね
貝あやの月さうのよ
白うきとゆきと

紙 杖
野 渡
荒 外
方 齋
標 雲
石 膽
二 及
君 十
凡 々
二 及

鳥

鳥あやの月さうのよ
白うきとゆきと

二 及

春鳥 去の多却ハ存をとりけ

中入たまふのホハはしまのり

寄居虫 逢ふはふよと名寄居のこくまを思

その細やまなを運止はるの月

猫 恋 移とのを毎夜を風あうり

恋猫のま下おか〜はる追れり

恋ふ〜き猫〜あ〜ぬりのせれ

恋ふ〜あ〜つ追猫のおあうり

恋猫よけお〜お〜〜〜

〜わ〜〜〜〜〜〜猫の妻

應々女

栗女

紙杖

墨巢

若助

公路

鶯笠

千紙

籠

長成

春の友七七

紙 鷲

毛のり〜のり〜や猫け恋

紙述す〜ま〜坂は〜猫の恋

堀のね〜〜〜猫の思ふ〜れ

猫の恋柳の糸と隣〜〜

紙 鷲 凡中〜〜〜〜の〜〜〜

甲斐〜〜〜〜たれ〜〜〜紙考

紙考 凡中〜〜〜〜も〜〜〜凡中の堂

凡中の堂 凡中〜〜〜〜〜〜〜〜〜

凡中の堂 凡中〜〜〜〜〜〜〜〜〜

凡中〜〜〜〜〜〜〜〜〜

紙杖

凌雲

米友

草

若助

紙杖

花妖

卓池

花約女

白齋

凡中の尾よつくりも河もんあはれ
宇橋
切凡中やまおろしすす川
貞穂

三月

二月 二月や野山を人かきしり

来 耜

二月や湖をさくさくふりぬる

梅 價

二月を海をのさくさくぬる

長 弁

彌生 あはれとまぬ生の子をうけ

紙 杖

兼登舟の中を流すのりぬる

雲 井

春在英辛八

曲水 曲まやがたがたしづか

其 成

汐干 汐干や舟の汐干の返りしづ

君 十

汐干は舟をさくさくふりぬる

川 十

汐干は舟をさくさくふりぬる

紙 杖

汐干は舟をさくさくふりぬる

千 影

汐干は舟をさくさくふりぬる

二 雀

汐干は舟をさくさくふりぬる

其 督

汐干は舟をさくさくふりぬる

若 助

汐干は舟をさくさくふりぬる

篤 老

雜

草餅

餅のうらやまゆくゆく餅の鳥
さくさくけりてや餅の柳
海の鳥のやまがけ餅の家
あふちのさくさく餅のあ
る餅のさくさく餅のさくさく
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家

千鶴
奇表
笑九
井眉
長成
千新
屋烏
素壁
雪雄
卧鵬

春の夜更

安良花
人丸忌
寒食
出代

接ふもちりしひのひてまの餅
あふちのさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家
さくさく餅のさくさく餅の家

羅風
奇表
曾外
夜来
塾場
夜来
三侍人
遅押女
作者不知

春朝

中代より人せむと連なり宿の袖 席道
 生代や柳よりうらふじしる髪 君十
 生代は袖の鳥は似て別い 夢南
 生代や まよとわたりあひの短炬 其成
 生への網糸はぬえけを短炬ま 花優
 生おしし人びとまきしまの網 雀尾
 生の所のふとまきしまの網 里蝶
 生りもたてくくやまきしま 寫老
 生りやまのき山もたて打 沙鴟
 生れとて人のまきしまの網 栗女

春朝文字

永日

忘霜

永きらのまきしまの網 非六
 永きや 永のまきしまの網 古翠
 永今にしてまきしまの網 雪雄
 永中よりまきしまの網 蒼虬
 永のせのまきしまの網 杉良
 永のまきしまの網 雲居
 永のまきしまの網 塊翁
 永の中まきしまの網 愚冊
 永のまきしまの網 鈍林
 永のまきしまの網 菊塙

柳花やあつらふ山の家
 さくさくは折付らぬ入り口
 中もくさくさ馬もくさくさ
 魚もくさくさ人のせうもくさくさ
 是もくさくさ年々くさくさ人の氣
 祇もくさくさとまはれて縁のま
 母の中うぬくさくさと木の香
 柳花のかさくさ人のまをんが
 子もくさくさと打歌のまをんが
 汗かかす暮のゆもくさくさと
 長成 世南 長林 其成 馬良 亞溪 魚眼 卓池 白圭 夢南

春花夏草一

大ききぬけてる浮田水は
 灯のかさくさおとふくさくさ
 糸もくさくさ春や秋のまをんが
 糸もくさくさと今迄のまをんが
 花の香もくさくさのまをんが
 糸もくさくさと春や秋のまをんが
 人もくさくさと月のまをんが
 花もくさくさと春や秋のまをんが
 糸もくさくさと春や秋のまをんが
 糸もくさくさと春や秋のまをんが
 糸もくさくさと春や秋のまをんが
 斗丈 太箔 可布 素樸 五錐 椿堂 千崖 南井 五英 卧鵬

昔之人は灯籠さしふく凡
 極くつてらんや春の夜は
 夕暮を舟浦へおとれて水の雲
 氷糸を門院のくまやそひぬ
 叩く今急と春の柳の枝
 人うらやまふ文の舟の智
 花をやまふさふりもさうか
 宿もくもあまのれをのまひぬ
 不世の花もゆふの人のよく
 杖杖とくくしきりおのふ

雪雄 蒼虬 岱李 鳥頂 儀二 月底 公路 凡馬 来報 草林

春夜夏中三

あけのさやあふんふさうり
 くらりくらりあふんふさうり
 暁や二百尺さうり守ふのち
 ことのさうりさうりさうりさうり
 留理鐘又おとるをさうりさうり
 天のさうりさうりさうりさうり
 中夜もさうりさうりさうりさうり
 いくさうりのさうりさうりさうり
 くらりさうりさうりさうりさうり
 ねりさうりさうりさうりさうり

呂十 井眉 一路 貞隰 自樂 星借 夙也 對山 千影 奇表

十六

櫻

八のめきおひるのうらを不首
 神代うらふま有やらるる
 人知ぬくもろびわ花の中
 朱のたよま有やさん 賦り神
 赤あまのめまのそまよ大井門
 不ちぬるのちまう人ま綴り
 ちうらんま追のりたうまま
 層貝の推ちままきふんば
 加うけままうとふまおさう
 ちまひままうけを眠るやま様

鮎 五 武 百 雄 冒 茅 大 月 米
 亭 芳 陵 丸 尾 作 乃 九 居 彦

春巻久中四

桜會女の百もほりてれちう様
 さうらうり出たう人けゆへ
 海井の松をうらうらうら
 又まみしハ種まかちまおさ
 郊のうらままうてはや山さう
 扱さうらうのうらや門のま
 まの田よまの島よ山さうら
 ちうらうらうらうらや山様
 又せうらうらうらま様
 ちうらうらうらうらうら

星 世 一 甘 素 祇 素 篤 公 秋
 譜 南 路 古 童 杖 集 路 拳

知人のひらうはほきささくが
 又少行い人のさくハなるり
 井と流くや人のさくど吹けじ
 石とらふまよりのけいさくが
 此まよとひのりのう山さく
 共あま夜よとむ人のさく返
 わくよ松もわくさくさくふ
 おさくくのやとまかや返の石
 山さくわさくさくまよさくさく
 山さくかたなうおまかさく

一七
 蚊 山
 葛 里
 魚 眼
 階 嶋
 奇 衰
 長 成
 文 衣 女
 野 渡
 淇 石

春夜夏五

女とあれ有てさくらのさく
 山さくかぬさかりしせさくさく
 夕さくさくまよつれてかてえ
 井けさくさくけて撮る橋の上
 まきのいて又さく風はまよさく
 よろやうは朝をさくけて山さく
 山さくく口のえよのさくの橋
 およかろうんてはさくかむある
 二のうてさくさくさくさく
 女とらふまよりのけいさくが

重 行
 万 籟
 十 丈
 文 常
 布 雪
 挂 眉
 閑 齋
 三 津 人
 孤 山
 雲 雄

遅
櫻

さうし打て人ハ帰るま話の電
留まざれと戸のまうふぬき
もさうのふさう人こまさう
乃さうの昔ハ不わりのまさう
まさうの怪ふもさうの
一まさうの初ふりれ
秀強いさうのわうの桜をやり
新金物新しし山桜のふ
ねれ羽あすのわうの桜のふ
月の出て湯まさとえうの桜のふ

蒼 木 喜 高 三 月 其 公 長 来
帆 海 祿 遠 師 居 成 路 成 報

桃

桜咲や下まぬま牛のふ
さうのたや肉うらなぬ桜のふ
孫らう開くや桜のふ
うらまも入まぬう桜のふ
人のふまられぬては流のふ
ふ桜のうけをぬまぬ桜のふ
松えり翻百孫と桜乃ふ
醒る有さうのさうの桜のふ
桜のふおまをさみりうり
綿らの切ては散るや桜のふ

無 五 棟 貞 雪 藍 滄 夜 尺 申
乙 英 堂 稟 雄 外 来 艾 祿

梨花

さうらうも吉乃ほし 枕のふ
枕のやまをさきして氷の連
透門より豊ん討すや梨子のふ
ぢりのふまをり誰まの足の跡
さくまかのまあう怪あうぢりのふ
菅人し今月足んぢりのふ
縁よりけむるのけりり梨乃ふ
梨乃ふまう山まおま入るま下が
灯よりまや柿のおあも一おつ
海棠 海棠やぢりハ泣つくまの癖

羅風 作者 鳥頂 嗽 木海 未魚 千奴 遅柳女 吾雀 玄蛙

春夜美草七

山吹

海棠よりまをりわさるの上
海棠やさうらうはあひまも春
山吹のやかあまきたのあつは
山吹の横おあひや古河しる
山吹の縁あはくや坊うほ
山吹のうけの控あ寝まをんじ
山吹とぢりれとる人もふの中
山吹のふや何うまむのま
山吹と中府のふのまきうら
山吹やふん後くも中しる

長祿 三侍人 昌代 星譜 公路 篤老 五英 藍外 若助 千奴

藤

山のふのきくわさるのふら 其梅
 山のふもぬれきま垣根の 素壁
 山のふもぬれきま垣根の 道彦
 風の山ぬれきま垣根の 長成
 山のふもぬれきま垣根の 蒼帆
 山のふもぬれきま垣根の 雪雄
 山のふもぬれきま垣根の 草林
 山のふもぬれきま垣根の 五英
 山のふもぬれきま垣根の 露井
 山のふもぬれきま垣根の 篤老

春夜集六十八

躑躅

香の灯のぬきわさるのふら 公路
 香の灯のぬきわさるのふら 約翁
 香の灯のぬきわさるのふら 雄尾
 香の灯のぬきわさるのふら 十壺
 香の灯のぬきわさるのふら 星助
 香の灯のぬきわさるのふら 竹吾
 香の灯のぬきわさるのふら 長祐
 香の灯のぬきわさるのふら 雲雄
 香の灯のぬきわさるのふら 楚山
 香の灯のぬきわさるのふら 玉之

赤人の書よ書きの山むらた
 り書拵てもよつくとる
 砂るやま水まらうと書拵
 書拵まらう旅人出てる
 書拵えんてのねや園の書拵の書
 今書拵の大きぬらや書拵
 本くれの書拵と返歩れ
 字拵や度地ま拵て書拵
 朝の書の水よこのり書拵
 人の子の有らけ書拵

士由
 竺タニ僊
 若助
 一 路
 篤 老
 千 親
 素 童
 卓 池
 雄 泷
 香 雨 女

春巻又七十

春
 石拵の書よ書きの山むらた
 り書拵てもよつくとる
 砂るやま水まらうと書拵
 書拵まらう旅人出てる
 書拵えんてのねや園の書拵の書
 今書拵の大きぬらや書拵
 本くれの書拵と返歩れ
 字拵や度地ま拵て書拵
 朝の書の水よこのり書拵
 人の子の有らけ書拵

千影
 其梁
 孤山
 奇 劍
 淫柳女
 十 丈
 馬 老
 梅 日
 東 后
 嗽 石

呼子鳥
 石拵の書よ書きの山むらた
 り書拵てもよつくとる
 砂るやま水まらうと書拵
 書拵まらう旅人出てる
 書拵えんてのねや園の書拵の書
 今書拵の大きぬらや書拵
 本くれの書拵と返歩れ
 字拵や度地ま拵て書拵
 朝の書の水よこのり書拵
 人の子の有らけ書拵

梅 日
 馬 老
 十 丈
 淫柳女
 奇 劍
 孤山
 其梁
 千影

鳥 歸
 石拵の書よ書きの山むらた
 り書拵てもよつくとる
 砂るやま水まらうと書拵
 書拵まらう旅人出てる
 書拵えんてのねや園の書拵の書
 今書拵の大きぬらや書拵
 本くれの書拵と返歩れ
 字拵や度地ま拵て書拵
 朝の書の水よこのり書拵
 人の子の有らけ書拵

梅 日
 馬 老
 十 丈
 淫柳女
 奇 劍
 孤山
 其梁
 千影

雲入鳥

くもいり鳥の入村きく雄のき

宇拍

梅鮎

うめあしはなむりまきうさく鮎

布丈

若鮎

わかあしはなむりまきうさく鮎

無し

梅鮎

うめあしはなむりまきうさく鮎

佳葉

春鮎

はるあしはなむりまきうさく鮎

三世丸

春花英七十一

春暮

はるよすがや暮人ふりまきのこれ

毘南

夏隣

なつよすがや日のあつくとま露

木海

未春

いまよすがやあつとつり未のま

蟻山

暮春

よすがのまきあつとつり未のま

飛多女

春

はるよすがやあつとつり未のま

公路

